

「出会いと感動」は、人を動かす原動力

若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰 仲島正教

「学習とは自分がするもの。学習とは自分たちがするもの。

まず、とにかくやってみることだ。

そしてわからないことにぶつかることだ。わからないことにぶつかったら、

もう一回やってみるんだ。いっぱい力を出し、いっぱい考えるんだ。

ああしたらどうだ、こうしたらどうだ、いろいろ工夫し、調べ、話し合ってみるんだ。

すると新しい発見に出会うはずだ。

そしてまたチャレンジしていくんだ。

これが『学習』なんだ。

この学習を支えてくれるのが仲間だ。それを応援してくれるのが先生だ。そしてみんながいい顔になっていくんだ。」

これは私の教室に掲示してあった言葉です。教師の役目とは、子どもがこういった学習を始めたくなる「心のスイッチ」をオンにしてやることだと思います。「えっなんで?」「おかしいなあ?」「わあすごい!」「やってみたい!」「もっと!」そんなスイッチが入れば、子どもは必ず自分から動き出します。

昨今、新任教師の研修を含めた現職教育が話題にあがることも多いのですが、前述の文章の「学習」を「研修」に、「仲間」を「同僚」に、「先生」を「教育委員会」にそれぞれ置き換えてみると、それは現職教育のあり方を示しているような気がします。

魅力ある授業に出会うと子どもが変わるのと同じように、魅力ある研修会に出会うと教師は変わります。私事ですが、学生時代、ある講義に現場の先生が来て、模擬授業をされたことがあります。今までのどの講義よりもおもしろく「早くこんな授業をつくりたい」と思ったものです。小学校現場に出てからは、淡路島での研修会で、奈良文化女子短大の土谷正規氏の講演を聴いたあと、興奮が冷めやらず明石までの帰路、連絡船のデッキに寒風の中ずっと出ていることが今でも忘れられません。奈良では岩井邦夫氏の忍者体育、静岡では築地久子氏の授業に出会い、大きな衝撃を受けました。それから、この三人の先生を目標に私の研修が始まったのです。奈良へは何度行ったか数え切れませんし、静岡にもよく足を運びました。あれからもう二十年以上がすぎましたが、その間、忙しいので行きたくないとか、遠いので疲れるとかは、全く思いませんでした。

笑い話ですが、教育学部の教授が「わかりやすい授業をすることが大切だ」と言っているその授業がわかりにくく「子どもが意欲を出す授業をしなさい」という教育委員会の研

修会こそ意欲がわからないのです。現場の教師に研修は不可欠ですが、問題はどんな研修会を組むかです。お仕着せの研修会が増えるだけでは教師は忙しくなるばかりです。前述の文章ではありませんが、本来「研修とは自分がするもの」です。教師自身が自分で「心のスイッチ」をオンにする研修会とはどんなものかを今一度、大学でも教育委員会でも学校現場でも考える必要がありそうです。

実は、私には結論が出ています。それは、本物の教師、本物の授業に出会う研修会を組むことです。一回でも二回でもそんな研修会に出会えば教師は必ず変わります。

先月、私は埼玉県のパナソニック商業高校定時制の平野和弘氏とその生徒たちの授業に出会いました。それはまさに感動のドラマでした。そう私が考える研修会のキーワードとは「出会いと感動」なのです。なぜなら「出会いと感動」は人を動かす原動力だからです。